

新世田谷文学賞・選考者紹介

堀江 敏幸(ほりえ としゆき)

- 区内在住／昭和三十九年（1964年）生まれ
- 早稲田大学文学学術院教授・早稲田大学短歌会会長
- 平成十一年（1999年）三島由紀夫賞、平成十三年芥川賞、平成十五年川端康成文学賞、平成十六年谷崎潤一郎賞、平成十八年読売文学賞小説部門、平成二十八年野間文芸賞
- 著作に『おばらばん』『熊の敷石』『雪沼とその周辺』『河岸忘日抄』『その姿の消し方』『坂を見あげて』『定形外郵便』『二月のつぎに七月が』などがある。

新世田谷文学賞・選評 堀江敏幸

総評

令和七年度から、これまでの世田谷文学賞が「新」世田谷文学賞となりました。小説、エッセイという枠を外し、枚数も四〇〇字詰め原稿用紙三〇枚以内で散文による作品が選考の対象とされています。

応募総数は一〇四作、最終選考に絞られたのはそのうちの一〇編です。作者の年齢は二十代から九十代まで幅広く、どの作品にも得がたい魅力がありました。戦争の記憶と現在を行き来させたもの、旅先での経験とそれをふまえた思索を記したもの、言葉をめぐる遊びとメタフィクション的な構造をもつもの、いわゆる小説と呼ばれるにふさわしい組み立てのあるものなど、興趣に富んでいます。

さじ加減ひとつでエッセイにも小説にも傾きそうな、本賞にふさわしい混交状態のなかで、読む側の自由もひろがりました。応募してくださった方々に、深く感謝申し上げます。

第一席「バラの名前」

ウンベルト・エーコの小説を思わせるタイトルのとおり、すぐ隣の家で引きこもりのような暮らしをしている語り手の義姉をめぐる、謎解きのような一篇です。少し変わったところがあつて、親しく行き来はしていないその独り身の義姉から、深夜にかかつてきた留守番電話。彼女の病と死、徐々に明かされていく夫の家族の、独特の空気。これまで知らなかった義姉の横顔が見えてくるにつれ、語り手自身も気づいていなかった心のこわばりが、徐々にほどけていきます。庭のバラをめぐる逸話が、文字どおり棘のように胸に刺さります。最後にちらりと登場する語り手の娘の言葉で、半生が相対化されるような構成も効果的でした。全体にただよう明るい苦みとでも言うべき味わいは、他の候補作にないものでした。

第二席「モーニングブルー」

世田谷線のなかで、語り手がかつて通っていた小学校の少女に声をかけられる導入部から、情景が路面電車のように流れていきます。過去をまわって現在に戻り、車両の色を用いた鮮やかな結末まで、遅滞がありません。小学校の一時期、下の子がお腹にいた母の代わりに、学校への送迎を引き受けてくれることになった二十歳の大学生との、短い交流が物語の中心ですが、豪徳寺の招き猫のエピソードも、ご当地ものとしての目配せではなく、構造のなかに過不足なく組み込まれています。社会に適合するのがむずかしそうな大学生のその後を深追いしない、少女らしい、よい意味での冷淡さも印象的です。

第三席「セレンデピティのスリランカ」

スリランカへのひとり旅の最中、体調不良による停滞が偶然引き寄せてくれた現地のひとたちとの交流が描かれる紀行文ふうの作品。やさしい言葉をかけて家に招いてくれた女性の、押しつけがましくない、適度な距離感のあるもてなしが、淡々とした筆致で描かれています。湿度の高いはずの土地で、どこか乾いた目をめぐらせながら、気持ちの肌をふれあわせてわずかな湿り気をつくりだす、それは登場する人々の手柄ではなく、言葉による遇し方が適切だったからでしょう。こういう空気を維持できる心が、いまこそ必要だという気がします。